

手をひいての集結生活、貨車に乗せられての引揚げ列車の苦しみなどいろいろある。

引揚げの途中、駅で昔をいっしょに働いた中国人の駅員から、抱えきれないほどの食べものやタバコ、サイダーなどをもらったこと、走り去る私の貨車にとび乗って法幣二万円をむりやり渡し去っていった名も知らない駅員など良い思い出もたくさんある。

終戦時日本人の駅員がいっせいに中国人になぐられたとの話のあの天津の駅の心あたたまる思い出は、苦勞のすべてを消し去るものである。

終戦は私にとって幸福というものを教えてくれた貴重な機会であった。

引揚げ船「江島丸」の沈没

東京都 北川 正

昭和二十一年一月厳寒の日、上海港から出港する引揚げ船である江島丸に乗ることができてほっとした。支那海

はどこまで言っても黄色である。この海水の色は揚子江や黄河の吐き出す泥土のためと聞く。

婦女子も多数乗船していた。その班長を命ぜられて、それらの世話を見ることになった。私は蚕棚の下方に横たわり、婦女子は床上に座を占めた。走ることに数時間を経て夕食の用意にかかったときであった。突然大きな爆発音とともに、船体が震動した。船中の人々は一瞬しんと静かになった。

「ただ今の音は、船の機関室の故障ですから、間もなく修理されますので、皆様そのまま静かにして下さい。」と船内に放送された。

その声が終わるや船内は、にわかに騒々しくなり、元気な男たちは、皆蚕棚から飛び降りて船室の中央に向かって一散に駆け出した。ここには船室から甲板板が出るための一本の梯子が掛けられていた。たちまち梯子のまわりは人の群れで一ぱいになった。上れるのは一人ずつである。若い元気者は他人の肩であれ、頭であれ飛び渡って梯子を目がけて飛びつく。地獄に落ちた餓鬼どもが一本の蜘蛛の糸を目がけて我先にとりすがする姿は斯く

やと思われた。

この動乱に巻き込まれたら、私の班の婦人や子供たちは、ひとたまりもなく圧しつぶされてしまう。私はすぐ班の人々を元の席に戻した。電燈が消えたので船倉の中は真暗である。私はリュックサックのポケットからローソクとマッチを取り出して点火したら、ようやくおたがいの顔を見合せ、落ちつきを取り戻した。

放送のようにたんなる機関室の故障ではないと判断して、人々に夕食の配膳で、にぎりめしを作り、各自に持たせた。次に、持っている下着やセーターを着込ませ、貴重品等は風呂敷包みにして身に着かせた。万一海中に漂流した場合を考えたからであった。こうして中央の梯子段に行ったら先ほどの混乱はなくなっていて全員無事に甲板に脱出することができた。甲板では、血まみれの負傷者が担架で運ばれていた。江島丸は浮流していた磁気機雷に触れたものであるとのうわさであった。

ちょうどそのとき、米艦のLSTといわれた小さな輸送船が通りがかった。本船に近づいて、びたり横づけになって本船の人々を転乗させた。若い元気者は、我先に

飛び移って行く。米兵のバンバンと撃つピストルの音に驚き、海中目指して飛び込むのが目撃された。米艦の水兵は「老人と子供、病人を先にせよ。」と大声で叫びながら再びピストルを天に向かって撃った。

それから米兵の指示通りに本船の人々は順序よく米艦に乗り移ることができた。もう一息で全員が転乗できる頃、米艦隊は静かに江島丸から離れた。何故かそれは大きな船が沈没するときの渦巻を避けるためであるという。

残されたのは、船長以下船員全部と引揚者数十人である。それらの人々が刻々と沈み行く船の先の方に集まって、手やハンカチを振って別れを惜んでいる。米艦に移った人々もそれに答えて手を掲げ声を出しているがどうしようもない。刻一刻、船尾から沈みかけて行く船が煙突からの入水で一きよに立ち上がるようになってしまった動きが止まった。黄海が浅いので船尾は海底に着いたが、空気のある船首とバランスがとれたのである。米艦から小さなゴムボートが降ろされて救助作業にかかった。小さなゴムボートなので多く乗せられない。数人ず

つ、くり返し運んだ。それを私たちは艦上に一人ずつ釣り上げる。暗い海中の作業は寒風の中で夜半まで続けられた。艦の中の女子の用便をバケツでつり上げて海中に捨てる。そのうち艦内で出産もあり、艦の内も外もたいへんな騒ぎであった。

こうして徹夜で行われた救助作業が終わり、上海港に引き返した。私は全快した筈のマラリアが再発したので、しばらく休養した後、豊栄丸に乗り換えて帰国することができた。

身重の引揚げ

群馬県 金子イチ

私が終戦を知ったのは八月二十日でした。当時長男が胃腸を悪くして、天津陸軍病院に入院していました。病院側は患者の身を気づかっていたことでした。正式に発表があったのは二十五日でした。異国で敗戦となつては実に哀しいことです。夢にも思っていなかったことが起

こつてしまったのです。なんの心構えもなく、とつぜんでただ驚くばかりでした。病院で子どもと泣き泣き四、五日過ごしました。連絡しようにもどこへしてよいかわかりません。看護婦さんが目を赤くして走りまわっておりました。

それから三日目、主人が四、五人の人達を迎えにきてくれました。なにかあつてはと、いろいろ気くばりしてくれ、やっとわが家に着きました。

隣組の人達もぶじに帰れて良かったと喜んでくれました。二、三日たつと、米軍の飛行機が屋根すれすれに低空飛行して、たいへんこわい思いをしました。

婦女子は何をされるかわかりません。一步も外には出られません。そうこうしているうちに、九月末、引揚げ命令が出まして、天津野戦倉庫に収容されることになりました。住みなれたわが家を無一文で離れるとなると、女にとってはなんともしのびがたい思いでした。はるばる日本から持ってきた嫁入り道具、遠い祖国から母が子ども達に送ってくれた着物、たいせつにしていたお金、数々の大事な品物、心中は複雑でした。